

氏名(本籍) 田中圭一 (新潟県)

学位の種類 文学博士

学位記番号 博乙第417号

学位授与年月日 昭和62年12月31日

学位授与の要件 学位規則第5条第2項該当

審査研究科 歴史・人類学研究科

学位論文題目 佐渡金銀山の史的研究

主査 筑波大学教授 芳賀 登

副査 筑波大学教授 文学博士 井上 辰雄

副査 筑波大学教授 文学博士 大濱 徹也

副査 筑波大学教授 岩崎 宏之

副査 筑波大学教授 文学博士 北見 俊夫

副査 筑波大学教授 理学博士 山本 正三

## 論文の要旨

本論文は近世で最も重要な貴金属鉱山である佐渡金銀山史に関する本格的な研究である。史料的には川上家文書、舟崎文庫所蔵文書等を利用し、多年にわたる佐渡地域の史的研究の成果等を活用して叙述し、さらに佐渡金銀山の位置を佐渡地方史の上に示した基礎的個別研究である。

本論文の内容は、①技術・経営の問題、②鉱山と貨幣経済との関係、③幕府直轄支配と地域住民の三点を重要事項としておさえた研究である。それを時代推移を基調にすえ、12章立ての構成をとっている。

第1章「佐渡金銀山の成立」は中世末における鶴子銀山の成立以来、上杉景勝領有から家康領有の佐渡金銀山の成立までの経緯を示す。

第2章「豪商田中清六の経営」では田中清六の運上入札制をその影響、崩壊と銀山経営の危機と関連させてえがいている。第3章「御直山制の考察」では運上入札制の行詰り、御直山経営の成立過程を示す。御直山山師はもちろんのこと、荷分制やアマルガム精錬法との関連づけをしている。第4章「慶長期諸問歩の動向」では佐渡金銀山内部の盛衰、地域の動向を具体的に川上家文書等をいかしつつ叙述、自分山経営の出てくる要因を導き出す。第5章「元和期の繁栄」では、御直山経営の崩壊、自分山山師の成長、その上での繁栄と寛永期における衰亡、および西洋技術の導入とその限界にふれ、結局は在来の技術へ立戻る理由を探究。第6章「佐渡金銀山の展開(1)―慶安～

元禄期一」では慶長・寛文期の衰微の具体的叙述から奉行所による金銀山復興策を「佐渡年代記」「佐渡国略記」の記述と地方文書を検討しつつえがいている。直山山師の動向も実証的に把握している。第7章「佐渡金銀山の展開（2）—田沼期・化政期一」では、田沼期の金銀山の動向では享保改革で幕府は直営放棄策を提起し、奉行所中心の鉱山回復策を採用し、上げ金と炭をはじめとする鉱山資材の島内安価自給策を採用し、田沼期には石谷清昌による全工程の集約化、精錬業者の抱入の外、マニュファクチャー化、化政期には資金創出策をとる。天保改革で不正告発をうけ、資金流用、上げ金策を実施している。

8章以下12章まで二部的構成で第8章は「鉱山町相川」の成立では各時代の相川、町割のあり方、他の鉱山町との比較、相川における鉱山経営の変化と町の変化、鉱山町のタテの変化を辿りつつ、鉱山の展開を辿ったもの。相川への到来者の本国とその時代的变化をおい、とくに水金町の変化、役銀負担の推移、山師商人の出身地、浪人層の多い事実等、文禄以前の屋敷売券の検討等注目すべき分析である。第9章「金銀山をめぐる流通」では、佐渡と日本海沿岸諸国との関係、人口約4万の相川の影響、寛文期になって佐渡が米需要国から米販売国へ転化、西廻り海運の成立とのかかわりのあることの指摘がみられる。資源国家の発想が次第に捻出され、大久保長安や鎮目市左衛門の果たした機能、鉱山の衰亡と物資輸出とのかかわり、米価問題での他地域との関連づけが叙述されている。第10章は「村と金銀山」で、留木と木炭を通しての金銀山と島のかかわり、佐渡では慶長期木炭生産禁止、他国炭の導入、炭座商人の独占、元和期の炭座請負制停止、元禄期には御林山の炭焼立命令等の変化が具体的に述べられ、木炭自給策の成立、それが炭の安価買上げによる農民層の拒否、留木生産の実情など、炭を通してみた幕府の鉱山政策の推移が辿る。

第11章「佐渡金銀山の労働」では金銀山の労働問題、金銀山荒廃の元凶ともいふべき水替人足の問題を対象として考察し、水替は鉱山にあってもっとも非生産的分野でありながら、鉱山経費の半ばに達する。こうした矛盾点に対する集中的技術改善と無宿者の導入のこと等が具体的に扱われている。終章「新時代への胎動」では島の住民の中に醸成される各種の変質、とくに文化年間相川町におきた靉騒動をとりあげて鉱山町社会内部の変質を論じ、村方については北立嶋村の文久3年「借金取調帳」を中心に金銀山とかかわって生きてきた海府の村の幕末的状况を調べ、同村の借金額で7,668貫余、年間500両余の利息を支払うに至り、立ちゆかなくなり、村重立層まで奉行所へ背を向けるという事実を指摘している。

以上よりみて、佐渡金銀山の歴史を幕府財政、採鉱・冶金の技術史的側面からみること、それより以上に鉱山の歴史を鉱山町や村方、佐渡全体とのかかわり、佐渡直轄領の意義を論じ、佐渡の歴史を幕政改革の要因とかかわらせている。以上のごとく佐渡金銀山を中心にすえ、佐渡の歴史とかかわらせながら叙述したユニークな個別鉱山史研究である。巻末には佐渡金銀山関係の史料、付表、付図を載せている。これらはいずれも著者自身による発掘史料であり、かつ史料分類も研究にふさわしい形で編集されている。

こうしたところにも本研究の特徴が集約的に表現されている。

## 審 査 の 要 旨

本論文は次の諸点で評価しうる。(1)麓三郎の『佐渡金銀山史話』の水準をはるかにしのぐ佐渡金銀山の個別史であり、日本の他地域の鉱山史研究の水準をこえている。(2)佐渡金銀山は世界、日本とかかわる有名鉱山で、幕閣の資源国家構想とかかわるものであるとの指摘は鋭い。それを技術、経営、貨幣流通を含めて位置づけたこと。(3)鉱山研究に限定せず佐渡地方史全体、佐渡の人々のくらし、鉱山町相川とのかかわり、海運との関係、日本海沿岸地域とのかかわり等を含めて検討していること。(4)開発、社会変動、地域構造の維持とかかわらせたビビットな把握を評価する。(5)年代記や佐渡国略記、川上家文書の史料批判、地方文書の精査による裏付け等、すぐれた史料批判能力をなしている。以上の点からしても、本研究はすぐれた業績といってよい。

しかし、かかるすぐれた実証的成果であるので今後これを出発点として、ゾンバルト理論の克服を含めて歴史理論の上に鉱山史をおいた研究を考えてほしい。ブラジル、カリフォルニア等の鉱山との比較研究にまで視野を広げたらと考える。佐渡金銀山の位置づけをもっと巨視的にとらえ直してみるとどうなるか、佐渡が何故直轄領でなければならないのかの位置づけの明確化がのぞまれる。こうした批評自体は、むしろ本研究が個別実証面において画期的にすぐれたものであることを示す。加えて筆者が大学外研究者として、多年の研究歴とすぐれた史料批判能力を有することが本研究を支えている。

よって、著者は文学博士の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。